




ひめゆり平和新館資料館

資料館だより



資料館を運営し、戦争体験を伝えてきた証言員 2018年2月6日

第61号

2018.5.31

目次

- 戦争体験者から非体験者へ—島袋館長の退任について・・・ 1
- 安谷屋良子元理事長が逝去されました…………… 3
- 資料館トピックス …………… 4
- ひめゆり平和研究所開所／糸満市平和ガイド育成事業に協力
／地方自治法施行 70 周年記念総務大臣表彰を受ける／入館者
2200 万人を達成／2017 年度企画展「戦争体験を未来につな
ぐ」開催中／アンネ・フランク・ハウスとの交流が始まる／
第 26 回日本平和博物館会議に出席／平和のための博物館・市
民ネットワークに参加／ひめゆりガイド講習会／『資料集 6
館の宝物—『感想文集 ひめゆり』を開く』刊行／弦楽四重
奏 ひめゆりレクイエム・コンサート
- 統計に見る 2017 年度 …………… 9
- ひめゆり研究ノート⑩
ひめゆり学徒隊引率教師たちとその時代 (3) …………… 11
- ひめゆり研究ノート⑪
引率教師の実像 (3) —玉代勢秀文先生…………… 13
- 仲宗根政善日記抄 (57) …………… 15
- 本棚 (仲程昌徳) …………… 17
- 2018 年度のイベント・事業 …………… 18
- 相思樹 …………… 18
- 資料館ガイド …………… 19

戦争体験者から非体験者へ—島袋館長の退任について

館長の島袋^{しまぶくろよしこ}淑子は、2018年3月末日をもって退任し、後任に副館長の普天間^{ふてん まちうけい}朝佳が就任しました。

島袋は、他の元ひめゆり学徒とともに、資料館の準備段階から展示づくりに携わり、開館後は資料館の内外で多くの方に戦争体験を語ってきました。2011年4月に7代目館長として就任し、戦争体験の継承が社会的な課題となる中で、『絵本ひめゆり』、アニメ「ひめゆり」の制作、企画展の開催など、戦争体験を伝える取り組みや後継者の育成に力を尽くしてきました。

普天間は開館当初からの職員として、元ひめゆり学徒の証言員と一緒に仕事をする中で、戦争体験を継承してきました。「沖縄戦の全学徒たち」展（1999年）、「ひめゆり学徒の戦後」展（2003年）など、戦後世代の視点からの展示会も企画しました。

ひめゆり平和祈念資料館は、館を設立し、運営してきた戦争体験者の世代から、非体験者の世代へと引き継がれます。元ひめゆり学徒がつくりあげた理念と活動を受け継ぎ、新たな活動を展開していきます。

生き残った者の務めとして

ひめゆり平和祈念資料館
前館長 島袋淑子

ひめゆり同窓会で資料館を作る話が出たときから、亡くなった学友の生きていた証を残すのは、私たち生き残った者の務めだと思っていました。

資料館の展示準備で一番つらかったのは、伊原第一外科壕に残された人の証言を聞いたときです。重傷を負った友だちが暗い壕の中で一人ひとり亡くなった様子が初めてわかったんです。「生きるのも死ぬのも一緒よね」と言っていたのに、自分が生きているのがつらくて、ずっとすみません、ごめんなさいという気持ちで、ご遺族に会うのが怖かったんです。でも開館の日、ご遺族が「あんたたちが生きているから、うちの娘がどうなったかわかるんだよ、ありがとう」と言ってくださって、少しずつ自分を許せるようになりました。

戦争体験を語るようになったのは、資料館ができてからです。初めの頃は展示室で遺品や遺影を見ると友だちの顔が浮かんで来て、途中で話せなくなったりしました。でも、話を聞いている人の表情がだんだん変わってくるんです。「沖縄戦のことが初めてわかった」、「平和を大事にします」と感想を書いてくれました。そういう積み重ねがあって、私たちが生き残ったから、亡き友のことも多くの人に伝えられるんだと思うようになりました。だけど今でも気がかりなのは、いつ、どこで亡くなったかわからない学友のことです。ケガでひどく苦しんだのではないか、ひとりぼっちで亡くなったのではないかと思うと、何十年経っても忘れることはできません。

2011年4月、先輩の本村つるさん、宮良ルリさんの後を継いで、資料館の館長に就任しました。



その直前に東日本大震災で多くの尊い命が奪われました。それから地震や津波、洪水が起こるたびに思うのは、「天災」は人間の力ではどうにもならないけど、人間が起こす戦争は「人災」なんだ、だから人間の力で止めなければならないということです。国がいったん戦争を始めたらもう止められません。私たちは子どもの頃から戦争は正しいことだと教育され、国策に少しでも疑問を持つ人は逮捕されました。しかし、沖縄戦で20万人もの命を失って、戦争がどんなにむごいものであるかを知りました。一番大事なのは命です。今の私たちは、「戦争はダメだ」と口に出して言えます。言論の自由、表現の自由がある今のうちに、戦争は絶対にやってはいけないと、みんなが言えば戦争は止められる、それを伝えたいのです。

今年3月までの7年間、館長の任を果たすことができたのは、多くの皆様のご協力とご指導のおかげです。心よりお礼を申し上げます。

ひめゆり平和祈念資料館がこれからも平和の砦として発展していくことを祈っています。

理念と活動を受け継ぎ、新たな活動を展開していきたい

ひめゆり平和祈念資料館

館長 普天間朝佳

島袋淑子館長は、ひめゆり学徒隊の体験者の館長として、多くの人たちへ戦争体験を伝えてきました。戦争を絶対に起こしてはならない、若い人たちに二度と自分たちと同じような体験をさせてはならないという強い思いのこもった語りは、多くのおみな様の心に響いてきました。

島袋館長は、職員一人一人に気を配り、励まし、職員にとって大きな支えになってきました。体験者であり90歳でもありながら元気な館長の姿は、職員だけでなく多くのおみな様の励みにもなってきたのです。

私は資料館の開館の時に採用され、それから29年間、島袋館長たち元ひめゆり学徒のおみなさんと一緒に仕事をする中で、戦争体験を聞き、その思いを受け取ってきました。島袋館長たち元ひめゆり学徒のおみなさんが、戦争を知らない人たちへ戦争のことを一生懸命伝えようとする姿を見てきました。

その圧倒的な姿に、自分には戦争を伝えるという仕事はできないと尻込みしていました。でも今はそんなことは言っていられない、じゃあ誰がやるのか、自分たちが引き継がなければという気持ちになっています。

ひめゆり平和祈念資料館には、島袋館長たちが残してくれた、たくさんの証言記録や戦争体験を伝えてきた活動の蓄積があります。それらは戦争体験を伝えるうえで欠かすことのできない大切な財産です。

島袋館長たちからバトンを受け継ぐのは私一人ではありません。資料館には、彼女たちが自分たちの手で育ててきた後継の職員たちが何名もいます。この職員たちと一緒に、島袋館長たちがつくりあげてきた理念と活動を受け継ぎ、新たな活動を展開していきたいと思います。



安谷屋良子元理事長が逝去されました

当財団の^{あだにやよしこ}安谷屋良子元理事長が2017年11月21日、93歳で逝去されました。2000～2002年にひめゆり平和祈念資料館館長、2002～2009年に「財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会」(現ひめゆり平和祈念財団)の理事長を務め、在任中は女師・一高女の学校跡碑の建立、「ひめゆり学徒の戦後」展の開催、資料館の展示リニューアル、戦争体験継承のための次世代プロジェクトなど、幅広い事業に取り組みました。

1940年に県立第一高等女学校卒業後、台湾に疎開。戦後、教育学を専門に学び、琉球大学などで教鞭を執られました。琉球大学名誉教授で、県教育委員会委員長、那覇女性史編集委員会委員長を歴任。1998年度には県内教育界で人材の育成や女性の地位向上に貢献したとして県功労者に選ばれました。

安谷屋良子元理事長の御逝去を悼む

ひめゆり平和祈念財団 前理事長 本村つる

安谷屋良子先生をお見舞いしたのは、たしか去年の初めか、前年の暮れだった。久しぶりに、色々資料館の御報告もしたいと思っていたが、生憎お食事中でゆっくりお話しすることもなく又来ますとお別れした。「有難う」とおっしゃったその言葉が先生の最後の言葉になってしまった。先生はお独りできつと淋しかったことだろうと想像しながらお通夜に伺ったら、大勢の甥、姪の方々がおられた。妹の安次富悦子さんは「姉は甥、姪を大事にしよく面倒をみていました」と話された。

先生は退官後、県の教育行政に関わったり、女性史研究者としても活躍された。ひめゆり同窓会の沿革誌、写真集、更に戦後の『続ひめゆり』の編集等で長として活躍された。2000年には館長、2002年から2009年までは財団の理事長に就任され同窓会館で執務しておられた。先生は敬虔なクリスチャンで、とてもおだやかで静かな方だった。よく読書をしておられ本も紹介して下さいました。私は色々なことを教えて頂いた。館運営等のことだけでなく、日常の報告にまで及んで、時によもやま話もするようになった。

「先生は琉大の男子学生から一番人気があった、と博子先生から聞きました」と話をもちかけると、「それは洋服の事でしょう」とほほえまれた。先生はご自分の洋服はすべて手作りとの事で、私はびっくりした。

お父様(戦後、沖縄諮詢会諮詢委員、沖縄民政府工業部長として復興に尽力した安谷屋正量氏)が晩年の頃は、良子先生とお二人首里のお宅で過ごされた。「良子、もうすぐ空襲が始まりますよ。」という父に「そうですね。その前にお食事をすませましょう。」と準備を始めて、食事の終る頃には、空襲の事などすっかり忘れていたとのこと。さすがに教育者だと更に先生を尊敬する気持ちが強くなった。そんな時、私ならきつと、親のことばを否定したことだろうに。

2004、2005年頃財団は、資料館運営に次世代プロジェクトを立ちあげたり、資料館のリニューアル等、多忙な時期で会議が多かった。先生は、「私は何も分かりませんから、お任せします。ただし責任は取ります」とおっしゃっていた。先生は2009年の初め頃、病気で休まれ復帰すること

はなく、その後私が理事長になった。私は理事長の責任の重さをひしひしと感じ常に迷っていた。早く退かねばと思いつつ悶々としていたが、良子先生が言われたように「みなさんに任せます。ただし責任はとります。」と言えなかった。その事を私は今も恥いている。それはそのまま人間の心の大きさであり、上司の心構えの違いなのだと、職を退いた後、つくづく思い知らされた。

良子先生は、「ひめゆり平和祈念資料館は、ひめゆり同窓会が残した大きな遺産である」とおっしゃっていた。私達同窓会は、戦争で学校をなくすという負の歴史を克服し、ひめゆり平和祈念資料館を建て、平和を訴える場とした。現在は戦争体験のない若い世代が、ひめゆりの心を引き継ぎ頑張っている。

私は「お通夜」でその事を御報告し「やすらかにやすみ下さい。有難うございました」と最後のお別れをした。先生はおだやかなお顔でねむっておられた。

先生は、ご自分の自慢話を一度もされたことがなかった。実に高潔で頼もしい立派な先輩であった。一時期先生とお近づきできたことは私にとって最も幸せなことだった。言いつくせぬままになりましたが、先生のご冥福を心からお祈りし、筆を置かせていただきます。



故安谷屋良子元理事長



安谷屋良子理事長（当時）を囲む元ひめゆり学徒と職員 2009年2月5日

資料館トピックス

◆ひめゆり平和研究所開所

2017年10月16日、当財団理事長^{なかほどまさのり}仲程昌徳、館長島袋淑子、証言員（元ひめゆり学徒）、職員らが参加して、「ひめゆり平和研究所」の開所式が行われました。平和研究所は、2008年、公益財団法人への移行を機に新たに起ち上げた事業です。ひめゆり平和祈念資料館の展示、教育普及、研究等を充実させ、また、ひめゆり平和祈念財団の理念を広く世界に発信する機関となることを目指します。これまで資料館で進めてきた調査研究を、開所を機にさらに発展させていきたいと思ひます。

◆糸満市平和ガイド育成事業に協力

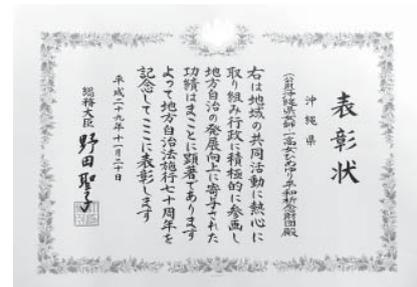
2017年11月11日、「糸満市平和ガイド育成事業」に協力し、アニメ「ひめゆり」視聴と、学芸員による展示ガイドツアーを行いました。同事業は糸満市主催で、沖縄戦終焉の地・糸満市の小中学生が、沖縄戦のガイドができるようになるまでを目標としています。2017年度受講生53人中、「学徒隊の足跡を学ぶ」グループ17人が、当館での研修に参加しました。

与那覇百子証言員から「何度も資料館に来て戦争の恐ろしさを学んで欲しい」と激励され、受講生一同真剣な顔で頷いていました。最後に代表の2人がひめゆりの塔前でガイド実践を行いました。声が小さいなど改善点も見られましたが、学んだことを堂々と説明し、沖縄戦を伝えたいという意欲が見えました。

◆地方自治法施行70周年記念総務大臣表彰を受ける

当館を運営するひめゆり平和祈念財団が、地方自治法施行70周年を記念する総務大臣表彰を受け、2017年11月20日東京国際フォーラムで举行された記念式典に副館長の普天間朝佳が参列しました。同表彰は、都道府県及び市町村の行政に積極的に参画し、コミュニティづくりに熱心に取り組んでいる民間団体、住民自治組織等が対象で、10年に1度実施されます。今回は全国から245団体と個人261名が表彰されました。ひめゆり平和祈念財団が沖縄県の平和教育・平和行政に長年貢献してきたことが推薦の理由でした。

この機会に、これまで当財団を支えてくださった、多くのみな様方に改めて感謝申し上げたいと思います。



表彰状

◆入館者 2,200 万人を達成

2017年11月28日、当館の入館者数が2,200万人を迎えました。2,200万人目の入館者は、修学旅行で訪れた福井県の石本茉穂さんです。島袋淑子館長から認定証と記念品が手渡されました。島袋館長は、石本さんに、「これから平和を守っていく若い皆さんと出会えて良かった。私たちの平和への思いを受け継ぎ、みんなに届けてほしい」と話しました。

石本さんの高校は、沖縄での修学旅行を初めて実施したとのこと。石本さんは、初めての沖縄で、入館2,200万人目になったことに「まさか2,200万人目になると思わなかったので、驚いています。これからも戦争のことを学んでいきたい」と感想を述べました。



2,200万人目の認定証を手にした石本茉穂さんと島袋館長、仲程理事長（右から）

◆2017年度企画展「戦争体験を未来につなぐ—ヨーロッパ平和交流の旅・ひめゆりの次世代継承の現在」開催中

2017年12月1日から2019年3月31日まで、ひめゆり平和祈念資料館の次世代継承の取り組みをテーマにした初めての展示会を開催中です。

前半は、第9回国際平和博物館会議と4つの平和博物館（オランダのアンネ・フランク・ハウス、イギリスのザ・ピース・ミュージアム、北アイルランドのミュージアム・オブ・フリードリー、韓国の戦争と女性の人権博物館）の報告、後半は、元ひめゆり学徒たちが、戦争体験のない職員と一緒に伝える仕事をしながら進めてきた資料館の世代交代について紹介しています。

アンケートには「この活動が世界全ての国でおこなわれれば戦争はなくなると思いました。話し合いでもいいので、戦争だけはやめてほしいです」（10歳・男）、「戦争体験を未来につなぐのは難しいと思っていました。けれど、体験された方の思いを知り、メッセージを自分なりの言葉で伝えていくことの大切さに気づきました」（33歳・女）、「アンネ・フランク・ハウス、ザ・ピース・ミュージアムがとても勉強になった。事実とその背景の関連性が大事とのコメントは刺激的で大切な考え」（53歳・男）などの感想が寄せられています。



テープカットを行う島袋館長、仲程理事長、普天間副館長 12月1日

◆アンネ・フランク・ハウスとの交流が始まる

昨年の12月7日～11日、アンネ・フランク・ハウスで映像制作者として平和教育に携わっているヤン・ポール・ダブルマンさんが当館を訪れ、視察・交流を行いました。これは昨年4月、ヨーロッパ平和交流の旅で当館職員がアンネ・フランク・ハウスを訪ね、教育部長のヤン・エリック・ダブルマンさんにインタビューしたことがきっかけとなったものです。「日本に出張する時は、ぜひひめゆり平和祈念資料館を訪ねたい」というヤン・エリックさんの希望を受け、甥のヤン・ポールさんが来館しました。初めて沖縄を訪れたヤン・ポールさんは、沖縄の自然や人々の生活に触れた後、ひめゆり平和祈念資料館を見学し、「今回の旅で、沖縄の魅力だけでなく、沖縄が抱える問題や、その歴史的背景をひめゆりに来て理解することができた。ヨーロッパでは沖縄やひめゆりの物語が知られていないので、ぜひオランダに帰った後は、ここでの思い出を共有したいと思う」とお話をされました。

さらに、ヤン・ポールさんは、アンネ・フランク・ハウスが平和教育活動の一環として、さまざまな国と地域で実践している「メモリーウォーク」について報告しました。「メモリーウォーク」は4日間の日程で、参加者（学生・生徒）が地域のモニュメントについて



アンネ・フランク・ハウスの平和教育活動を報告したヤン・ポール・ダブルマンさん（後列左から2番目）

専門家と一緒に学び、街頭インタビューやモニュメント周辺の撮影を通して、映像作品を作り上げていく活動を行います。その映像技術トレーナーを務めているヤン・ポールさんは「映像制作を通して参加者は、モニュメントの歴史を知り、最終的には、自分でも気付かぬうちに歴史を伝える側になるのです」と語っていました。現在、資料館では、アンネ・フランク・ハウスとの共同プロジェクトとして、沖縄で8月に「メモリーウォーク」の実施を計画しています。

◆第26回日本平和博物館会議に出席

2017年12月7・8日の2日間、沖縄県平和祈念資料館で開催された「第24回日本平和博物館会議」に、館長の島袋淑子と副館長の普天間朝佳が出席しました。今回は4件の協議題が出され、「ピースツーリズムについて」は、各館と行政の関連部署や観光業者との連携も必要であるという認識で一致しました。「核兵器禁止条約の国連での採択に関するパネルの巡回展」の提案は、全会一致で賛同されました。「戦争からさらに遠くなった世代への取り組みについて」は、各館の若い世代に向けた取り組みや課題の報告がありました。「国内外の博物館・美術館との連携・交流」については、その意義について共通認識を持つことができました。

◆平和のための博物館・市民ネットワークに参加

2017年12月9・10日、「平和のための博物館・市民ネットワーク全国交流会」が、京都の立命館大学国際平和ミュージアムで開催され、副館長普天間朝佳と学芸員前泊克美まへどまりかつみが参加しました。

追手門大学井出明氏の「ダークツーリズム」をテーマとした基調講演と、加盟団体からの15本の報告がありました。講演では、ダークツーリズムとは何かを共有、討議する機会となりました。報告では、各館や各団体から、近況やさまざまな取り組みが紹介され、「次の世代にどう継承していくか」を共通の課題として再認識できた有意義な機会となりました。

2018年度は初の沖縄開催となり、当館が受入機関となります。沖縄戦や継承について議論する充実した場としたいと考えています。

◆ひめゆりガイド講習会

3月10日に「2017年度ひめゆりガイド向け講習会」を開催し、43名の参加がありました。

第1部の「ひめゆり平和祈念資料館とひめゆりの塔周辺ガイドツアー」は、学芸員・説明員の案内で、4グループに分かれて展示室内とひめゆりの塔周辺を回りました。第2部では「証言員・職員との質疑応答」を行いました。「当時の教科書について教えてください」「学校で楽しかったことは何ですか」「ご家族はどうしていたのですか」などの質問に、証言員は自分の体験を交えながら答え、参加者も熱心に耳を傾けていました。

参加者からは、「資料だけでは分からない、当時を実感するような息づかいを感じました」「体験者の話

を聞いて良かった」「今の自分たちがしなければいけないこと、伝えていかなければならないことを感じました」といった感想が寄せられました。

◆『資料集6 館の宝物—『感想文集 ひめゆり』を開く』刊行

2018年3月23日、『ひめゆり平和祈念資料館 資料集6 館の宝物—感想文集 ひめゆりを開く』が発行されました。開館以来発行を続けてきた『感想文集 ひめゆり』の第1号～第27号までを、当財団理事長仲程昌徳が分析し、まとめたものです。入館者から寄せられる感想文は、当館への大事な評価でもあり、重要な指針となっています。その感想文を時期毎に区分し、入館者が何を思ったのか、どう感じたのかを、実際に感想文を引用しながら紹介しています。



ひめゆり平和祈念資料館の見学を通して、来館者の方々が戦争や平和について、どのように感じたのか、考えてきたのかがわかる内容となっています。多くの方に手にとって頂きたい本です。

価格は1,200円(税込)です。詳細は、資料館(☎098-997-2100)までお問い合わせ下さい。

◆弦楽四重奏 ひめゆりレクイエム・コンサート

3月26日、「弦楽四重奏 ひめゆりレクイエム・コンサート」を「天色カルテット」と共催で実施しました。「天色カルテット」で第1ヴァイオリンを担当した野田笑加さんと、アンコールの「故郷」の合唱でピアノを弾いた野田峰丘さんは、ひめゆりの母校、沖縄師範学校の野田貞雄校長のひ孫にあたります。二人は沖縄戦で亡くなった野田校長の遺族として資料館を訪れ、以来、ひめゆり学徒隊や沖縄戦のことを学んできました。今回は、音楽仲間のみなさんと、鎮魂のための演奏会を企画しました。

ひめゆりの塔の前で、ひめゆり学徒が卒業式で歌うはずだった「別れの曲」、解散命令後に歌った「故郷」を演奏した後、多目的ホールで約1時間のコンサートをおこないました。

島袋淑子館長は「この空いている席に校長先生が座って、ひ孫さんたちの演奏を聞いていらっしゃる気がして、先生を思い出しながら演奏を聴きました」、笑加さんは「平和がずっと続いてほしい、亡くなった方々を少しでも慰められればという思いで、一音一音大切に弾きました」、峰丘さんは「沖縄戦を伝えるために少しでもできることがあればやっていきたいです」と話していました。参加した証言員やひめゆり同窓生は、美しい音色に耳を傾けながら、当時のことを思い出し、沖縄戦で亡くなった方々をしのびました。



天色カルテットによる弦楽四重奏

統計に見る2017年度

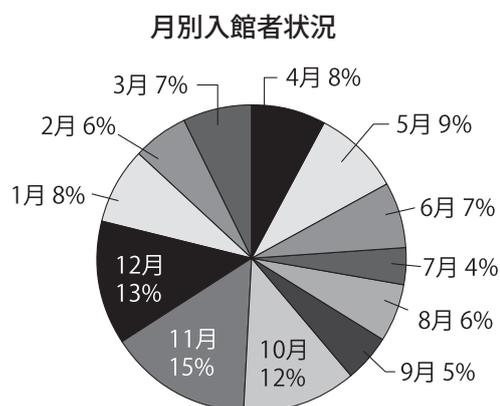
※小数点第1位を繰り上げているため、合計が100%でない場合もある。

1. 総入館者状況 (入館料免除を除く)

- ・ 昨年の入館者は555,546人(前年の579,865人より24,319人減少)。1か月の平均入館者は46,296人、1日平均は1,530人(慰霊の日、台風休館除く363日)。うち外国人は5,893人。
→開館以来29年間で28番目の入館者数。
- ・ 開館以来28年間の累計は22,194,160人で、年平均入館者数は765,316人、1日平均は2,125人(ただし、1989年度の開館期間は9か月間)

2. 月別入館者状況

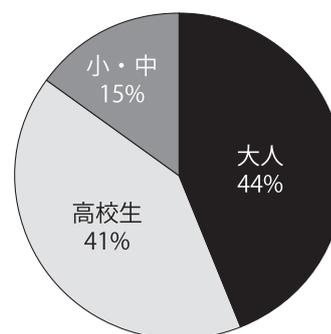
- ・ 昨年1年間で入館者が多かった時期は修学旅行シーズンの10月～12月の3か月間。3か月間の合計は220,468人で、総入館者数の40%(小数点以下を四捨五入。以下同じ)。
- ・ 入館者数が少ない時期は7～9月。3か月間の合計は84,488人で、総入館者数の15%。



3. 類別入館者状況

- 【総数】**入館者の割合は、大人が44%、高校生41%(そのうち98%が団体で入館)、小・中学生15%(そのうち75%が団体で入館)。29年間の平均では、大人が44%、高校生41%(そのうち98%が団体で入館)、小・中学生15%(そのうち75%が団体で入館)。
- 【団体】**団体の割合では、特に高校生の割合が68%と高く、次いで小・中学生19%、大人13%となっている。

類別入館者状況 (個人・団体含む)



4. 学校団体入館状況

- ・ 昨年度、修学旅行で来館した学校団体は、2,026校、286,711人(前年の2,012校、286,462人に比べ+14校、+249人)。内訳は、小学校が105校で5%、中学校が591校で30%、高校が1,330校で65%。

【都道府県別】

- ・小学校 沖縄 37校、鹿児島 31校、東京 8校の順に多い。
- ・中学校 兵庫 81校、大阪 70校、岡山 67校、徳島 52校の順に多い。
- ・高校 東京 192校、神奈川 126校、埼玉 100校、愛知 90校の順に多い。
- ・沖縄の中学・高校の全体に占める割合は、それぞれ中学 2%、高校 0.6%。

【月別】

- ・5月 17%、11月 16%、12月 16%、10月 13%の順に多く、4か月間で全体の62%を占める。
- ・小学校 6月 28%、5月 25%、10月 8%の順に多い。
- ・中学校 5月 41%、4月 21%、6月 14%の順に多い。
- ・高校 11月 22%、12月 20%、10月 19%の順に多く、3か月間で全体の61%を占める。

5. 入館料免除

入館料免除総数 33,404人

- | | | |
|---------------------------|-------|---------|
| ・団体（県内学校団体・特別支援学校・一般団体含む） | 147団体 | 6,577人 |
| ・学校団体引率者 | | 18,586人 |
| ・修学旅行下見 | 558校 | 1,600人 |
| ・個人免除者（身障者手帳等提示の方） | | 4,590人 |
| ・慰霊の日（6月23日） | | 2,051人 |

※沖縄県内学校団体は、入館料免除となるため、総入館者数には含まれない。ただし、学校団体の総数及び人数には含まれる。

資料館の動き（2017年度）

- | | |
|------------|---|
| 2017年4月7日 | 「ひめゆり・ヨーロッパ平和交流の旅Ⅱ」に職員4人を派遣 |
| 5月28日 | 『沖縄県史 各論編6 沖縄戦』刊行記念シンポジウムに、報告者として職員2人を派遣 |
| 6月23日 | 第71回ひめゆりの塔慰霊祭 |
| 6月28・29日 | 三重大学、松阪市立豊地小学校に職員2人を派遣、「平和講話」を実施 |
| 7～8月 | 夏期開館時間延長実施（閉館時間を18:00に延長） |
| 8月6・9・12日 | 夏休み特別企画「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」 |
| 8月13～14日 | 夏休み特別企画「平和講話」 |
| 8月16日 | 教員向け講習会 |
| 9月7日 | 平和ガイド団体による合同学習会「山城本部壕（サキアブ）で何を学ぶか」 |
| 10月16日 | ひめゆり平和研究所開所式 |
| 11月19日 | 戦後70年特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」終了 |
| 11月20日 | 地方自治法施行70周年記念総務大臣表彰を受ける |
| 11月28日 | 入館者2,200万人を達成 |
| 12月1日 | 2017年度企画展「戦争体験を未来につなぐーヨーロッパ平和交流の旅・ひめゆりの次世代継承の現在」（～2019年3月31日） |
| 2018年3月10日 | 2017年度ガイド向け講習会 |
| 3月23日 | 『資料集6 館の宝物ー『感想文集 ひめゆり』を開く』刊行 |
| 3月26日 | 弦楽四重奏 ひめゆりレクイエム・コンサート |
| 3月30日 | 元ひめゆり学徒の島袋淑子館長が引退 |



ひめゆり研究ノート⑩



ひめゆり学徒隊引率教師たちとその時代 (3)

*本稿は、ガイドの会と当館の合同学習会(2017年3月19日)で報告した内容を文章化したものです。

上・中・下の3回で連載予定でしたが、4回に増えたため、(上)は(1)、(中)は(2)、今号は(3)に変更します。

3. 戦時下の引率教師たち

1944(昭和19)年12月、第32軍司令部の三宅忠雄参謀と沖縄県中等学校教育行政担当の真栄田義見事務官との間で、数回にわたって学徒の軍務への動員に関する協議が行われた。協議の結果、「a 敵が沖縄に上陸した場合に備えるために、中学下級生に対して、通信訓練を、女学校上級生に対しては、看護婦訓練を実施する。b 此の学徒通信隊、看護婦隊を動員するのは沖縄が戦場になって全県民が動員される時であるが、この時の学徒の身分を軍人並びに軍属として取扱う」ことが決定された¹。

女子学徒が動員されることになったのは、西岡一義師範学校女子部長兼県立第一高女校長が女子学徒の協力を強く主張したからだという証言がある。

「県立第二高等女学校の校長は、西岡女子部長がそうした提案を軍にしたとき、内心では反対だったが、それを言うことはできなかった。『あの男が軍へのへつらいであのような提言をしなければ、女生徒たちを戦争に巻き込まないですんだものを』とうらめしがっていた。」²

女師・一高女で学徒の動員の役割を担ったのは、下記の記述から分かるように、先述の西岡部長と西平英夫師範学校女子部生徒主事であった。

「そのころ、軍は女子学生を看護要員として、非常に備えて訓練する方針を明らかにした。女師・一高女は沖縄陸軍病院のために約二百名を確保し、訓練を行なえと言うのであった。西岡部長は、私に師範のほうからおよそ百二、三十名を確保するよう指示した。私は、当時本科二年生は教育実習中でもあり、三月には卒業を予定されていたのでこれを除き、本科一年以下予科二年まで約百三十名をもってこれに当てるよりほかないと答えた。一高女のほうはこれに即応して三、四年生を中心にして計画された」(元女師・一高女教員・西平英夫)³

学徒の動員をめぐるのは、下記にあるように、職員会議が開かれたようである。会議の中では反対の意見を述べる教師もいたようだが、当然のことながら表立って反対することはできなかった。むしろ多くの教師は学徒の動員を当然のことと受け止め、軍の命令に従っていったというのが実状のようである。

「(当時女師・一高女の教師であった一引用者注) 佐久本興吉、島袋盛輝氏の証言によると、島袋哲氏(新聞投稿者一引用者注)の述べている職員会議の事実はあったようである。佐久本氏も島袋氏も、軍の要請に応じるべきかどうかには就いての職員会議で断然反対であった。しかし、表面に立って反対の理由を述べたかどうかははっきりしない。」(元女師・一高女教員・仲宗根政善)⁴

1945年3月23日、米軍による沖縄上陸作戦が始まると、女師・一高女の生徒は南風原にある沖縄陸軍病院に配属された。学徒隊引率教師の人选の権限を持っていたのは西岡部長だったようだ。

「(当時女師・一高女の教師であった一引用者注) 島袋氏は、防衛隊に召集された。西岡一義校長は、さきに平良松四郎教諭、徳田安信教諭が防衛隊に召集されたのを、軍に交渉して払いさげてもらった。島袋氏は、西岡校長に同様な交渉をして防衛隊から免除してもらうように願い出たが、聞き入れられなかった。」(元女師・一高女教員・仲宗根政善)⁵

学徒隊の引率教師たちの役割は、軍との調整役となり生徒たちを管理することであった。生徒たちの目を通して見えてくる戦場での教師たちの姿は、砲弾に震える生身の人間としての姿であり、生徒の安全を気遣いその死に悲嘆する姿である。

「寮にいた生徒たちは3月23日の夜に沖縄陸軍病院に動員されたが、首里に住んでいた私たち数名の生徒はそれから遅れて数日後に陸軍病院に向かった。安里の学校まで迎えに来たのは内田文彦先生だった。内田先

生と真っ暗な中を歩いていると、米軍の艦砲射撃の様子が見えた。震えるぐらいこわかった。内田先生も震え上がっていた。生徒の一人が、『この先生、私たちを連れて行くというのに、こんなに震えて』と言っていた。私たちは沖縄だからどこで死んでもいいけど、この先生かわいそうだね、と話をしたことを覚えている。」(ひめゆり学徒隊生存者・瑞慶覧初枝の証言)⁶

「仲栄眞先生、石川先生も生徒と一緒に水汲みをなさいました。私たちが井戸で水を汲んでいる時、いきなり飛行機が超低空で近づき機銃掃射が始まりました。ものすごい轟音でした。ああこれで最後だと思い井戸の縁にしがみついて震えていましたが、弾は当たりませんでした。石川先生が『大丈夫か』と転がるように駆けてこられ、皆の無事を確認していらっしやいました。」(ひめゆり学徒隊生存者・新崎昌子の証言)⁷

「西平英夫先生から、親友の島袋ノブさんが米軍の攻撃で亡くなったと連絡があり、第三外科の壕にかけつけました。しばらくすると、玉代勢秀文先生がスコップを持って戻って来られました。島袋ノブさんを埋葬しに行ってきたのです。玉代勢先生は『伊波さん、君の親友を失ってすまないことをした』とおっしゃり、メガネを取って泣いておられました。」(ひめゆり学徒隊生存者・比嘉文子)⁸

4月1日、沖縄本島に上陸した米軍は、日本軍を次々と打ち破り、5月下旬には日本軍司令部のある首里へと迫ってきた。日本軍は米軍の本土侵攻を少しでも遅らせるため、本島南部へ撤退し戦いを継続する方針を採る。5月25日、陸軍病院にも南部への撤退命令が出され、大雨と砲撃の中、教師も生徒もびしょ濡れになりながら、南部へと向かった。教師の中には、ガス弾(黄燐弾)の影響で幼児のようになった生徒を連れて移動した者もいた。

「5月9日の一日橋分室へのガス弾攻撃で、先生2名と生徒3名が亡くなりました。そのほか2名の生徒がガス弾によって、子どもみたいになって、自分の身の回りのこともできなくなっていました。南部への移動の時、その生徒たちを連れていったのは、本部配属の親泊千代子先生でした。ガスにやられた生徒たちは、急ぎなさいと言っても急ごうとしない、モンペの紐が外れても自分で結べないという状態になっていて、大変だったようです。叱りながら、励ましながら歩いていました。」(ひめゆり学徒隊生存者・本村ツル)⁹

南部に撤退してから約3週間後の6月下旬、米軍が南部に進撃してくる。米軍が近くに迫った6月18日夜、陸軍病院から学徒隊へ解散命令が言い渡された。全員一緒にいては危険なのでバラバラになって逃げるようにということだった。壕を出た後どこへ行けばいいのか、どう行動すればいいのか、教師たちにもわからなかった。一人でも多くの生徒に生き残ってほしいという思いと、捕虜になってはならないという矛盾した思いを抱えながら、教師たちもまた生徒と同じように壕を出た。中には生徒たちを斬り込みに誘う教師もいた。

「私は壕内の生徒を集めて最後の指示をした。『(前略—引用者注)しかし戦線の突破は決してやさしいものではない。もしだれかが傷ついて動けないようなことがあったら捨てて行け。戦争というものは不人情なものだ。どこまでも戦友は助けたいのが人情であるがそれでは皆がやられてしまう。一人の負傷者のために皆死んでしまってはなんにもならない。一人でも多く生き残らねばならない。しかし—捕虜にはなるな』。生き残れということと、捕虜になるなということの間に大きな矛盾を感じて私は言葉を切った。」(元女師・一高教員・西平英夫)¹⁰

「『斬り込みに行く。敵を一人でもやっつけて死ぬんだ』と引率の新垣仁正先生はいきまいていました。そして車座に座っている私たち3年生の一人ひとりに聞いていました。『行くか、行かないか』私たちは手榴弾も持たされていましたが、全員「行きます」と答えました。身の回りを整えておきなさい、日が暮れたら出発するとのことでした。」(ひめゆり学徒隊生存者・城間素子)¹¹

(62号につづく)

(普天間朝佳)

-
- 1: 自衛隊・富士総合学校教育部『沖縄作戦における沖縄島民の行動』1961
 - 2: 池宮城秀意『沖縄に生きて』サイマル出版会 1970
 - 3: 西平英夫『ひめゆりの塔—学徒隊長の手記—』雄山閣出版 2015
 - 4: 「ひめゆりの塔の記」(仲宗根政善日記12巻)当館蔵
 - 5: 「ひめゆりの塔の記」(仲宗根政善日記12巻)同上
 - 6: ひめゆり平和祈念資料館『戦後70年特別展 ひめゆり学徒隊の引率教師たち』2015
 - 7: 同上
 - 8: 同上
 - 9: 同上
 - 10: 西平英夫前掲書
 - 11: ひめゆり平和祈念資料館資料委員会『ひめゆり平和祈念資料館 ガイドブック(展示・証言)』2010

込に向かい、その後死亡した。

6月18日の解散命令後、壕内での分散会で、予科3年上間道子が浪花節を、東風平恵位先生が「海ゆかば」を歌い、秀文がダンスを踊り、みんなで「ふるさと」を歌った。翌未明、壕は米軍の攻撃を受ける。壕の中には「玉代勢先生、助けて」「先生、殺して」という生徒の声が響いた。秀文の母もこの攻撃で命を落とした。生き残った秀文は、息を吹き返した生徒たちを死体の間から引っ張り出し、岩しずくを集めた水を飲ませた。攻撃から約1週間後、秀文は生徒たちを連れて壕を脱出するが、その後、死亡したとみられる。

3. 「七つになった和也兄ちゃんを見たいね」

1944年9月8日、秀文は身重の妻秀子と長男和也、次男守文を宮崎に疎開させ、離ればなれの生活となった。出港の日、家族を見送る秀文は「来年の四月、きっと行く」と伝えた。先述のように、子どもたちの将来を見据え、県外での生活を考えていたためだ。妻子の疎開と入れ替わるように、秀文の母が石垣島からやってきて、秀文と兄秀当(県立第一中学校勤務)2人の世話をを行うようになった。

1944年当時、日本政府は疎開政策の推進を図っていた。同年7月、政府は沖縄県民の県外疎開を決定。一般住民の県外疎開は、軍の要請に基づいたものであり、食糧不足のなかでの口減らしと、軍の足手まといになる老幼婦女子の県外移動が目的だった。秀文の妻子の疎開も、出発当日に知らされるなど、非常に急な話だったようだ。秀子は秀文に「この軍艦が魚雷にやられたら、この帯で親子四人一束になって艦と運命をともにします」と告げている。海を渡るということは死を覚悟してのものだったのである⁷。

疎開先の家族には頻りに手紙を送っており、届いたものだけでも30通にのぼる。疎開先への秀文の手紙は、愛情に溢れている。長男和也宛の葉書には「赤ちゃん生まれたかね。可愛いでしょ。守ちゃんと二人で仲よくお守りしてあげなさいよ」「七つになった大きい和也兄ちゃんを見たいね」などと書かれている。子どもたちの成長を喜び、家族の生活を心配し、初の長女に会いたい気持ちを募らせる父親の顔が見える。しかし、2月以降の

手紙には「われらの前途には生も死もない。ただ皇土を守り抜くことだけだ」(2月7日)、「沖縄の空気は孤立化の状態にあることを知っておかねばならぬ」(2月10日)、「万一の場合を予想して、決してとりみださぬように覚悟せよ」(2月12日)などと書かれるようになる。3月2日付を最後に、秀文の手紙は途絶えた。

戦場で生徒に気を配りながらも、秀文はきっと家族を忘れることはなかっただろう。秀文も、秀子も、子どもたちも再会を待ちわびていたに違いない。宮崎で生まれた長女純江は、とうとう父の顔を見ることができなかった。

秀文の手紙は、家族によってまとめられ『ひめゆり教師の手紙』として出版され、昨年、その実物が長男田代和也氏により当館に寄贈された。教師としての姿、父親としての姿を具体的に見ていくこと、その人生が断絶された事実を知ることが、戦争の理不尽さを改めて伝える手だてにはないだろうか。(学芸課 前泊克美)

-
- 1 文検：「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験」の略。この試験に合格すれば、高等師範学校卒業者以外でも中等教育機関の教員免許が取得できた。
 - 2 故・玉代秀文 玉代勢秀子『ひめゆり教師の手紙』1988、ニライ社
 - 3 ひめゆり平和祈念資料館『墓碑銘—亡き師・亡き友に捧ぐ—』2004
 - 4 2に同じ
 - 5 宮良ルリ『私のひめゆり戦記』1986、ニライ社
 - 6 ひめゆり平和祈念資料館『戦後70年特別展 ひめゆり学徒隊の引率教師たち 図録』2016
 - 7 2に同じ
〔参考文献〕
沖縄県教育庁文化財課史料編集班『沖縄県史 各論編6 沖縄戦』沖縄県教育委員会、2017
西平英夫『ひめゆりの塔 学徒隊長の手記 第三版』雄山閣、2015
仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』角川ソフィア文庫、1995

仲宗根政善日記抄 (57)

〔1980年〕四月二十六日

誕生日。朝起きるとき、「てるかわのてるしのてりよるやに きもうまれ」とおもろの句を自分なりになおして、誦した。曇りがちではあるが、やはり誕生日だけに、さわやかであった。

午後二時から八汐荘で平和をつくる百人委員会の小委員会があって、今回参議員に立候補する候補者にアンケートを出すので、その具体的な項目についての話し合いを持った。

私はしょっぱなに、ホワイトビーチにロングビーチ〔注：米海軍原子力巡洋艦ロングビーチ号〕が寄港したとき、放射能が異状を示したことについて、科学技術庁が、ロングビーチの寄港のせいとは断定出来ないと、アメリカ側と調子を合せて、調査打ち切りをしたことについて、設問すべきことと提案した。沖縄県民の不安は決して、あの声明で解消されたからではなかったからである。原船寄港についても拒否すべきか、容認すべき〔か〕を問うべきことを提案した。

それにつけ加えて、日米両政府は、沖縄に核があるのかないのかについてはあいまいにしたままである。沖縄をのぞく日本国内では、核のないことは確認できている。しかるに、沖縄では核がないとの確認はされていない。核に関して、日本は〔非〕核三原則をとっているにもかかわらず、沖縄には核があるのかないのか不明のままである。返還協定から時がたって、国民も政府が、アメリカがないといっているからないのだということに馴れて、本土と沖縄の大きなちがいを忘れてしまっている。その差をもう一度問いなおすべきであると提案した。

おそらく県民もそのことに気がついていなかろう。復帰して八年、まるで、本土並みになっているように、国民は考えている。基地は59%をしめ、核については、あるのかないのか不明のままになっているのである。

実弾射撃演習、那覇空港の自衛隊基地についても提案した。

昨二十五日、アメリカは、イランの人質救出作

戦に失敗したことについて、大統領は声明を発表した。

この作戦に嘉手納にいたMC一三〇が投入されたうた〔が〕いがあると、共産党の東中光雄氏が政府を追及した。細田防衛庁長官は、これにしづしづ情報を収集したと答えている。

MC一三〇は、特殊侵攻作戦用の輸送機であり、アメリカ本土に六機、沖縄に四機、西ドイツに四機しかないという。もしMC一三〇機が、救出作戦に使われたとすると、沖縄から発進した可能性は極めて強い。

沖縄は世界情勢の変化を敏感に感じさせられる。日一日と基地の重圧がましつつある。

三十四年前の四月二十六日は、悲しい日であった。佐久川米子が戦死し、学徒隊からはじめて犠牲者を出した。上原婦長から佐久川が負傷したとの報告を受けた。空襲がひどく壕の外に出られない。まもなく容態が急変して死亡したとの報告を受けた。

かけつけてみると、小さい壕でしづくは降るようにしたたり、ぬかるみの上に板をわたして、やっと通れるほどのむさくるしい壕であった。生ぬるい空気が充満して臭気がひどく鼻をつく。多くの負傷病〔者〕の中に佐久川がやすらかに眠っていて、その周囲を四〔、〕五名の学友がとりまいて泣きじゃくっていた。

上原婦長が黒髪をすいているところであった。婦長はアルコールを脱脂綿にひたして、ていねいに佐久川の体を清めた。

最後の学芸会で予科二年生が、「釈迦とその弟子」を演じ、佐久川は釈迦にふんしたが、数珠をまさぐり、念仏を唱えていたあの相好そのまま合掌している。

最初の戦死であった。

いあわせた学友は、静かに祈りを捧げた。隣にいた重傷の患者も手をあわせていた。そばに泣きふしていた姉の和子さんは、カバンから最期のために用意してあった師範の制服をとりだして着せた。

制服をまとって安らかに眠っている姿を見ると、私は深い敬虔の念にうたれた。勇士とともに制服の姿で死出の旅立ちをする。その胸には靖国神社が美しく描かれているのであろうか。九時ごろ遺体は喜屋武部落の上の丘陵にはこぼれた。

丘辺の草には露がしっとりとおいていた。青草をはらい、すでに十幾柱の戦病死者が葬られており、それに並べて学友の手によって穴が掘られてあった。棺にいれるでもなく毛布にくるんだまま担架にのせて静々と運ばれた。西の方の本部丘陵上にはすさまじい光を放って照明弾があがり、艦砲弾が悪魔のうめきのようにビュービューとうなりつつづけていた。

冷たい土穴にいたいたしくも乙女の屍を葬らねばならない。姉和子さんが、一塊の土をふるえるようにして遺骸にふりかけ、ついで学友によって埋められて行った。盛りあがった塚のまわりに学友が頭をたれ、しばらく黙禱をささげて、「海行かば」を歌った。艦砲のすさまじい丘辺のこずえには月がこうこうとさえていた。(沖縄の悲劇)

戦争がすんで、陸軍病院あとにも自由に行くことが出来るようになり、私は、佐久川を葬った跡を確認しておきたいと思って行って見た。丘にはもう雑木がしげり見当がつかなくなっていた。草をわけ木のしげみをくぐって辿って行った。佐久川を埋めた地点をやっとさがしあてた。私はぞっとして身をひいた。いかなる心なき者の仕業であろうか、数十の遺骸がほりおこされて積まれている。よく見ると畑にするためとも見える。しかし、他に畑に出来る地所はいくらでもある。遺体をうめた処をあらす必要はないはずだ。何たる無惨なし方か。私はふるえた。墓標はまだいくつか残っていた。その一つ一つをたしかめたが、佐久川の墓標は見つからなかった。実は遺骨を集骨して遺族の方にとどけたいと思って来たのだったが、その望みもたたれた。

五月二十五日、移動の夜、渡嘉敷良子を重傷患者と壕に残し、砲弾の雨の中を脱出して、佐久川を葬ったこの地点までのがれた。照明弾がひっき

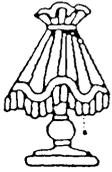
りなしに飛び、砲弾がさくれつしづづけていた。高熱のあとで、ふらふらした足をふんばりながら、やっとここまで来た。本部の生徒たちはもう出発していない。佐久川の最期をとげた壕の入口におりた。中にローソクの光が見えた。おきざりにされた重傷患者たちであろう。

喜屋武部落西北端に、軍の炊事場があった。ここでは飯をたく煙をあげなければいけないので、たえずねらわれて砲弾が集中した。ここにやっと歩ける患者たちがふらふらしながらあつまっていた。気性のはげしい児玉見習士官が、これは命の綱だ。しっかりとぎって離すのではないぞと、これから隊伍をととのえて行くための注意を与えていた。やっと隊をとと〔の〕えて出発して街道へ出た。砲弾は周へんに落下しづづけた。隊伍をととのえて一団をなして進むことはかえって危険だとわかった。患者たちは綱を手放し、力の強い者は先へ先へとすすみ、弱い者は次第にとり残されていった。

もう三十五年もたった。私どもにとっては戦争体験は忘れようがない。この郷土を戦争にいったいのかかわりのない島にしたいというのが、沖縄〔戦〕を体験した県民すべての念願である。しかるに、今、沖縄基地は全国の53%をしめ、しかも海兵隊は急速展開軍として、印度洋にもペルシャ湾にも発進する態勢をとっている。

嘉手納飛行場にいた特殊侵攻作戦機MC一三〇機が、イランの救出作戦にも出動したとつたえられる。これが、二十余万の遺骸のうもれている沖縄の三十五年後の現状である。昔から重圧を負いつづけた沖縄にさらに歴史の重圧は日に日におもくのしかかりつつある。

※読みやすさを考慮して、字句を補った箇所がある。〔〕は編集で補った。旧字体は新字体へ変更し、明らかな誤字は改めた。



本棚

仲程 昌徳

大城貞俊『一九四五年 チムグリサ沖繩』

第34回(2017年)さきがけ文学賞を受賞した大城貞俊の小説「一九四五年チムグリサ沖繩」は、第一話「樹」、第二話「穴」、第三話「島」、第四話「海」、第五話「月」、第六話「道」で構成されている。それぞれの「話」は「一九四五年六月二十三日、ぼくは樹の上にいた」(第一話)、「一九四五年六月二十三日、わたしは穴の中に身を隠していました」(第二話)、「一九四五年六月二十三日、私は島に隠れていました」(第三話)、「一九四五年六月二十三日、ボクは海の中にいたよ」(第四話)、「一九四五年三月二十八日、私は月を眺めていた」(第五話)、「一九四五年六月二十三日、私は暗い夜道を太八車を押していた」(第六話)といったように「第五話」を除き「一九四五年六月二十三日」を「話」の発端にしていた。

一九四五年六月二十三日は、周知の通り、第三十二軍司令官の自決で、沖繩戦の組織的戦闘が終了した日とされている。「話」は、その日から始めていたのである。

六月二十三日を発端とする伊江島での戦闘(第一話)、摩文仁での出来事(第二話)、国頭のアムラビの戦前、戦中の苦難(第三話)、「台中丸で一家全滅した」話(第四話)、県立第三高等女学校の生徒の話(第六話)に、「第五話」の「一九四五年三月二十八日」の慶良間の「集団自決」の「話」を加えると、作品は、沖繩戦全般及び沖繩戦の特質とされる出来事を一応揃えているといえる体裁になっていた。

「一九四五年チムグリサ沖繩」は体験談を集めた形のものである。それぞれの語りは、事実に基づいているとはいえ、虚構であることは、第一話の「樹」がよく語っていた。

「樹」は、佐次田秀順の「米兵の目を逃れつつ二年間のガジマル樹上生活」(『証言資料集成 伊江島の戦中・戦後体験記録—イーハッチャー魂で苦難を越えて—』)に収録されている体験談をもとにしていた。

佐次田は、美里村石川出身、19年11月、伊江島に守備隊の一員として派遣され、米軍の上陸を迎え撃つ中で負傷、その後、壕を転々とし、同部隊の山口とともに、ガジマルの木の上に隠れ、「昭和22年3月10日前後位」まで、二人で暮らした、という。

「樹」の二人は、「大宜味村から召集された正規の兵士」比嘉正昭と「伊江島から召集された防衛隊員」

で「召集される直前まで伊江国民学校で教師をしていた」阿波根朝良に変えられ、切込みに失敗し、「樹」の上での避難生活が始まり、そこから自決する兵士、芋を持ってきた村の娘、米兵に暴行される女性たちを見つめることになる。そして二人がいる樹へ「だんだんと米兵の姿が迫ってくる」ところで終わっていた。

体験談と小説との間には、いくつもの違いが見られる。それは、すべての「話」に共通するもので、作者は、なぜ、体験談にない出来事を書き込んでいったのか、丁寧に分析していく必要があるのはいうまでもないが、ここではあと一つ、別の面から付け加えておきたいことがあった。

「樹」の「話」は、これまで井上ひさしの原案で蓬萊竜太が戯曲化していただけてだけでなく、山城達雄も取り上げていた。前者は、沖繩出身兵士と本土からきた兵士との間に起こった埋めがたい溝の深さを、後者は助け合いながら生き抜いた姿を描いていたのであるが、「樹」は、二人を、同じ沖繩出身兵士にしていたのである。

二人が樹上生活を始めることになったのは、手榴弾だけを手にしての切込みに出て、それが不可能だとわかってひきかえしたが、部隊に合流することができなかったことによる。樹上で、切込みに出たときなぜ死ななかつたのかが話題になる。

「こんなふうに樹上で怯えていても、お前は生きる方がいいと言うのか？」という比嘉の問いかけに、阿波根は「そうです。生きる方がいいのです」と答える。そしてその応答のあとで「足が竦んだ戦場で沸き起こった感情だ。でも素直な感情だ。マジムンの声に素直に従っただけだ」といった説明がなされる。

作者が「樹」で書きたかったのは、この「生きる方がいい」といった、一言にあったのではないかなによりも繰り返し現れる「素直」という言葉には、当時の合言葉「靖国で会おう」といった合唱に対する違和感がこめられていた。作者が、前二作と異なるだけでなく佐次田の体験談とも異なる形の沖繩出身兵士二人の組み合わせにしたのは、この「素直」な感情の共有を力説したいがためではなかったのだろうか。

2018 (平成30) 年度のイベント・事業

当財団では、今年度、下記のイベント・事業を計画しています。

○イベント

- ・2017年度企画展「戦争体験を未来につなぐーヨーロッパ平和交流の旅・ひめゆりの次世代継承の現在」(2019年3月31日まで)
- ・「夏休み親子戦跡めぐり」(2018年7月28日、8月18日)・教員向け講習会(8月3日)
- ・ガイド向け講習会(2019年3月)
- ・冬休み平和講話ーひめゆり学徒の沖縄戦(2018年12月)・ガイド向け講習会(2019年3月)
- ・アニメ「ひめゆり」、証言ビデオ「平和への祈りーひめゆり学徒の証言」の特別上映会

○事業

1. ひめゆり平和祈念資料館の管理・運営事業
 - (1) 教育普及
 - (2) ひめゆり学徒と沖縄戦の資料収集・整理保存・調査研究
 - (3) ひめゆりの塔の管理及び慰霊祭の挙行
 - (4) その他
2. ひめゆり関連戦跡壕の調査・保存・活用事業
3. ひめゆり平和研究所
 - ・アンネ・フランク・ハウスとの共同プロジェクト「メモリーウォーク」(2018年8月)
 - ・助成(ひめゆりをテーマにした映像作品を公募し表彰する)

○出版

『感想文集第29号』、『年報第29号』、『資料館だより』第61号、第62号、2017年度企画展「戦争体験を未来につなぐーヨーロッパ平和交流の旅・ひめゆりの次世代継承の現在」の図録

相 思 樹

「捕虜になった人っているんですか？」

説明員 仲田晃子



子どもたちが校外学習で見学にくると、展示室では子どもたちの様子を見ながら声かけをしています。「これは七十二年前に実際に打ち込まれた砲弾だよ。割れてないから不発弾だね。」壕の中、暗いよね。沖縄戦のときに使ってた病院はこんなものだったって。今の病院と比べたらどんなかな?」といった感じです。沖縄戦のことを一から話すのではありません。子どもたちの反応に応じて話していると、質問をしています。のだという雰囲気になり、次々と質問が出てきます。

子どもたちの疑問はさまざまです。陸軍病院壕の模型を一緒に見ながら、負傷兵と生徒の看護の様子をひと通り話したところ、6年生が「何で(壕を)土で作るんですか」とたずねました。ガマの模型を見ながら、当時の生徒が、捕虜になるより死んだ方がましだと考えていたこと、捕虜になったらどうなるかと思っていたのか、投降呼びかけに誰も応じなかったので攻撃された、という話をしたら、5年生が「捕虜になった人っているんですか?」と聞いてきます。

子どもたちは驚くほど細かい沖縄戦のエピソードを知っていることがあります。なぜ壕を土で作ったのか、と疑問に思っています。壕は土で作ったわけではありません。壕がどんなものかがはっきりしていません。子どもたちの小さな疑問に答える必要があります。展示室で出てくる質問は、講話などの場で出てくるものとは違ってきます。答えはひとつではなく、小さなストーリーやエピソードを話すことになることもしばしばです。

説明員は、「戦争体験者にかわって戦争体験をなしている」と思われていますが、必ずしもそうではありません。展示室で沖縄戦の全てを伝えることはできませんが、目をクルクルさせて話を聞き、小さなやりとりで具体的なイメージをつかんでいる子どもたちの様子を見てみると、資料館の展示室で人が対応する意義を感じます。

資料館ガイド

◆多目的ホールご利用のご案内

当館ではひめゆり学徒隊や沖縄戦について学ぶための平和講話（約45分）、またはビデオ視聴を事前予約制で承っております。ご予約時間は以下のとおりです。お電話にて空き状況を確認後、FAXかメールにて申込書をお送り下さい。

【講話・ビデオ】9:00 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00

※ビデオ作品 ○証言ビデオ「平和への祈り—ひめゆり学徒の証言」（25分／1994年）

○アニメ「ひめゆり」（30分／2012年）

※年末年始（12月30日、31日、1月1日～3日）・旧盆（旧暦7月13日～16日）は、講話は休みで、ビデオ視聴のみ受け付けます。慰霊祭前後（6月21日～24日）は、ビデオ上映会を行うため、予約はできません。

- 収容人員：約200人（席）
- 資料館へ入館していただく場合に限りさせていただきます。
- 多目的ホールは講話及びビデオ視聴以外の目的（セレモニー等）には利用できません。
- 予約時間に遅れた場合、予約状況によってはキャンセルさせて頂くこともございます。

◆VTR室のご利用について

証言ビデオ「平和への祈り—ひめゆり学徒の証言」とアニメ「ひめゆり」等映像作品を視聴することができます。詳細はお問い合わせ下さい。

◆資料館ご利用案内

①入館受付 午前9時～午後5時（閉館は午後5時25分） ②休館日 年中無休

③入館料 大人¥310 高校生¥210 小・中学生¥110

団体料金（20名以上）大人¥280 高校生¥190 小・中学生¥100

④交通

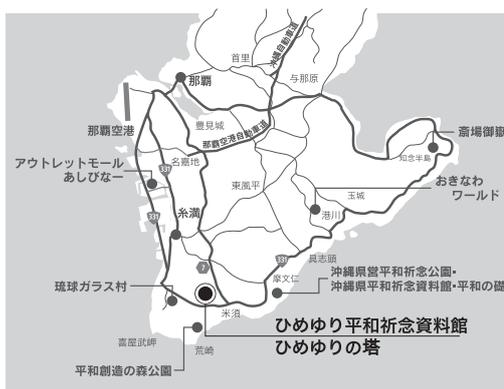
【バス】旭橋・那覇バスターミナルから〔89〕で約30分、

糸満バスターミナルで〔82〕〔107〕〔108〕に乗り換え約15分、
ひめゆりの塔前下車

【モノレール・バス】モノレール那覇空港駅から赤嶺駅まで約4分、

赤嶺駅前（糸満・豊崎向け）バス停で〔89〕に乗車し約20分。
糸満バスターミナルで〔82〕〔107〕〔108〕に乗り換え約15分、
ひめゆりの塔前下車

【車】那覇空港より約30分



ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第61号

2018（平成30）年5月31日発行

編集・発行 公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立 ひめゆり平和祈念資料館

〒901-0344 沖縄県糸満市字伊原 671-1 ☎098-997-2100

URL <http://www.himeyuri.or.jp/> Facebook <https://www.facebook.com/HIMEYUIRI.PEACE.MUSEUM/>